

フッサールにおける再生としての想像概念について

東洋大学 伊藤 俊介

本発表の目的は、エドムント・フッサールの想像論の変遷を辿り、中期草稿(以下「1909年草稿」)における「再生」としての想像(Phantasie)概念を検討することである。それにより、本質認識的方法的基盤を担う働きとしての想像が明らかとなる。

想像対象はしばしば原像である知覚対象の模像とされてきた。サルトルが評価したように、フッサールの志向性理論は想像対象の模像性を否定する。原像としての対象を志向する想像と知覚の区別は意識の在り方に存する。しかし、フッサールは初期から想像の非模像性を主張したのではない。『論理学研究』(1900)と1904/05年冬学期講義(以下『冬講義』)で想像は代理物を介す意識であるとされたが、「時間意識」の研究により代理表象モデルの問題が解決され、想像は「再生」という仕方で直接対象を志向する意識であるという再生モデルが提示された。

では、「再生」としての想像とは何か。第一節では、フッサールの想像論の思想的変化を辿る。『冬講義』でフッサールは物理的内容を媒体として像を志向する「像意識」(絵画、写真等)を軸に、像意識と想像の共通性(ともに代理物を必要とする)と、知覚と像意識の共通性(ともに感覚内容を必要とする)と対象への志向の相違性(直接的か間接的か)から、知覚と想像の区別を図る。しかしながら、想像には感覚内容が存在せず、像意識との共通性がない。そこで感覚内容の代替として「ファンタスマ」が想像にあるとされた。しかし、ファンタスマと感覚内容の違いが説明できず、『冬講義』での知覚と想像の区別は頓挫した。ここにおいてフッサールは「絶対的意識」を発見し、ファンタスマもすでに絶対的意識によって構成された一つの意識であることを自覚する。つまり、知覚は「現在の」であるのに対し、想像はあたかも現前させる意味で「準現在の」である。フッサールは再生的に準現在化させる「想像変様」によって直接対象を志向する意識を想像と結論づけた。

第二節では、想像における再生概念を想起(Erinnerung)における再生概念の区別から明らかにする。想起も想像も想像変様を被った意識である。フッサールは後者のみの意識を狭義の想像とし、想起も含めた意識を広義の想像とした。しかし、『イデーネーI』(1913)における想像と想起の区別が想像の二義性により不明確となった。これらの区別は両者の再生概念から区別できる。想起は過去の現実的経験を現在において再生する意識であり、現在との時間的隔たりが知覚と想起の区別を可能にする。他方で、想像は知覚との時間的隔たりによって区別されない。想像としての再生は「いわば(gleichsam)」何かを経験することを意味する。この「いわば」の意識の理解により、本質認識的方法的基盤としての想像が明らかとなる。